

藤原宮大極殿院の調査

—第186次

1 はじめに

大極殿院は、藤原宮の中心部に位置し、周囲を回廊で囲まれた東西約120m、南北約160mの区画である。その中央には、即位や元日朝賀などの儀式の際に天皇が出御する大極殿があり、南側には正門である大極殿院南門が位置している。

大極殿院では、戦前に日本古文化研究所が、大極殿と大極殿院回廊において小規模な発掘調査をおこない、回廊や「西殿」・「東殿」、さらに大極殿の礎石位置と建物規模を推定している。

奈良文化財研究所都城発掘調査部では、これまでに藤原宮中枢部の様相解明を目的として、大極殿北方（藤原宮第20次）・西門（藤原宮第21次）（『藤原概報 8』）、東門および東面回廊（飛鳥藤原第117次）（『紀要 2003』）、南門（飛鳥藤原第148次）（『紀要 2008』）、南面回廊（飛鳥藤原第160次）（『紀要 2010』）の調査を継続的におこない、主要な建物の配置と構造および運河をはじめとする造営期の溝の状況をあきらかにしてきた。昨年度の飛鳥藤原第182次調査からは、大極殿院内庭南側の発掘調査に着手し、大極殿院内庭が朝堂院朝庭と同様に磔を敷いて整備されている状況をあきらかにした（『紀要 2015』）。

今年度は、大極殿院内庭南側の整備・利用状況と宮造営過程の解明を目的に、第182次調査区と大極殿基壇との間に位置する1,548㎡を発掘調査した。当初は、大極殿現存基壇際までの1,634㎡を調査する予定であったが、予定していた調査区の東北側には基準点や仮整備時の排水溝が存在したため、これを避けて北壁東半を4mほど南に移行しL字形の調査区とした。また南側は、昨年度検出の造営期の南北溝SD10801B、およびそれから分岐するSD11250の性格を解明するため、688㎡分を第182次調査区北半と重複させた。調査期間は、2015年4月2日から2016年2月26日までである。

なお、以下では東西畦より南側の第182次調査区と重複する部分を南区、北側の新規調査部分を北区とする。

（廣瀬 寛）



図67 大極殿院内庭の磔敷（北から）

2 検出遺構

基本層序 調査地の基本層序は、上から整備盛土、耕作土、床土と続き、調査区東半では床土の直下に藤原宮期の磔敷がある。磔敷より下位は、東半では上位から褐色砂質土、橙褐色砂質土と磔敷下の整地層が薄く堆積し、これより下位には宮造営期以前の遺構検出面となる暗褐色土がある。

西半では、石列SX11252より西側で、磔敷の直上を奈良・平安時代の包含層である茶褐色土が覆っている。Y = -17.673付近より西側は磔敷が削平により残らず、かわりに奈良時代の整地土（SX11251）が中央部に広がり、これより西側では奈良・平安時代の包含層である黒灰色土が露出している。黒灰色土の下位には東半でもみられた暗褐色土があるが、その上層部分は磔敷由来と思われる磔が多く混じる層となる。この磔層を除去した面で、藤原宮期およびそれ以前の遺構検出をおこなった。

藤原宮期の遺構

磔敷広場SX10888 これまでの調査で、大極殿院内庭は磔敷の広場であったことが判明している。整地土上に拳大の磔を敷きつめる。概ね標高71.2m前後で磔敷を検出しているが、北区東北部では71.0m前後となる。第182次調査で検出した磔敷の標高と顕著な高低差はないが、北区東北部ではやや低くなることが判明した。

運河SD1901Aと重なる部分については、埋め立て後に沈下しているため後世に削平されず、磔敷が残存している。この部分の磔敷の下層は、砂質土と粘質土を交互に積み重ね、版築状の丁寧な整地をおこなっている。こ

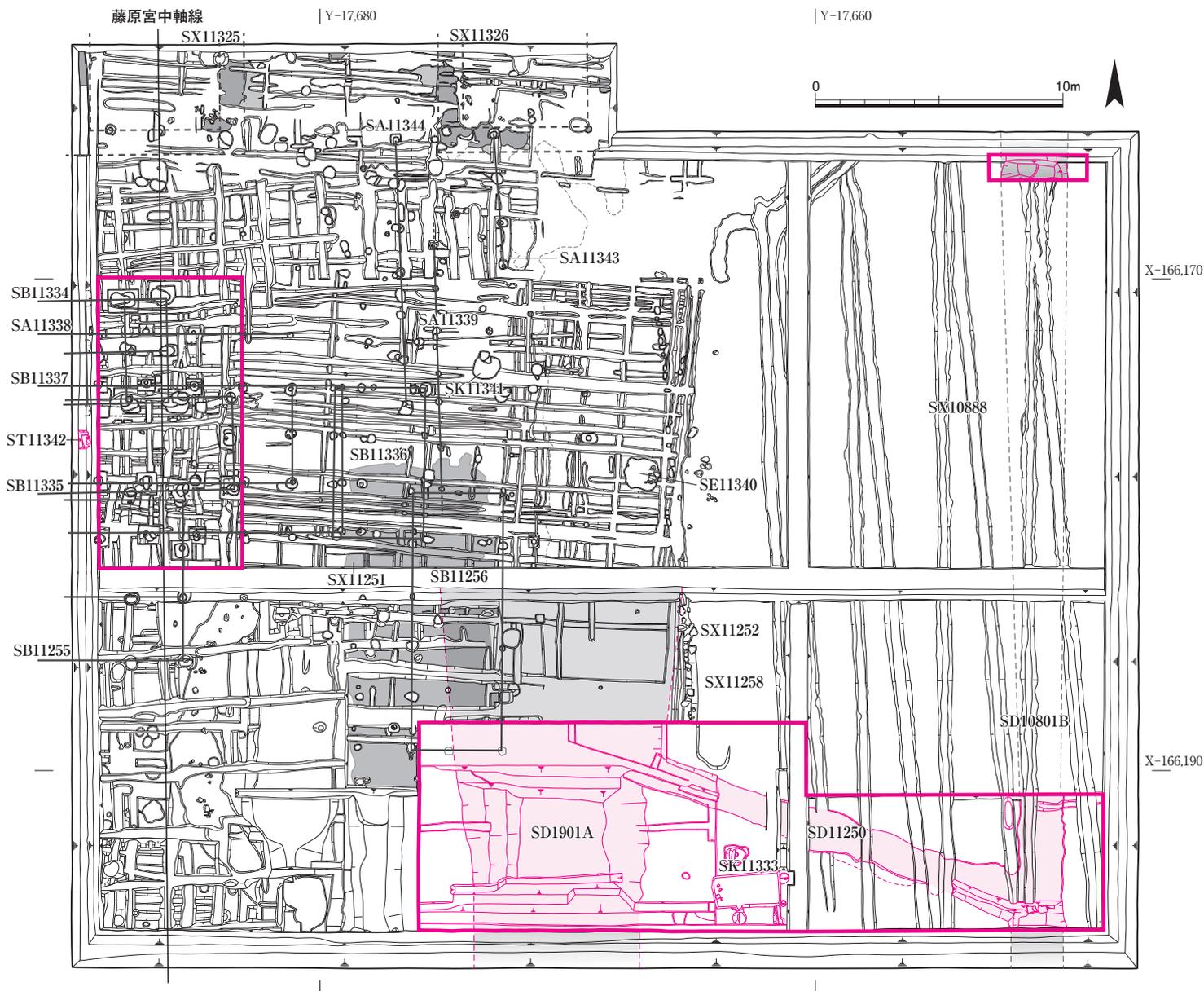


図68 第186次調査区遺構図 1:250

の整地層の途中、主にSD1901Aの直上からその東側にかけて分布する明茶色粘質土（図70最上層）の上面では、概ね南東から北西方向へ走る、幅0.1m、深さ0.1mの並行する小規模な溝を多数検出した。轍状の痕跡ではないかと考えられる。

北区では、藤原宮中軸線を中心に幅6.0mの範囲で暗褐色土上層の礫混じり層を除去して精査したが、顕著な遺構は検出されなかった。

（清野陽一）

階段痕跡SX11325 調査区北西隅で検出した凝灰岩切石の底部。本体の大部分は抜き取られて失われているが、

原位置を保っている。おそらく、整地土上に貼り付いた底部分が、抜き取りの際に本体から分離して現地に残ったものと推測される。平面的には東・西側面と南東隅部分が残るのみで、また北・西側については調査区外へ延びるが、かろうじて、逆凸字形の平面プランを捉えることができる。その検出位置からみて、大極殿の南面中央に取り付く階段の痕跡とみられる（本書75頁参照）。石材は、二上山産出の白色角礫凝灰岩であるが、周囲からは竜山石（流紋岩質溶結凝灰岩）の破片も出土しており、両者が組合わされて構築されていたとみられる。

切石底部間の東西距離は内法で5.2mを測る。これは推定される大極殿の柱間よりもやや大きい。西側の凝灰岩内端は後世の小溝により削り込まれており、本来の内法幅については幾分狭くなるとみられる。また、階段の出については、基壇本体が北側の調査区外にあるため確定できないが、現状で3.0m以上（凝灰岩南端までの距離）を測る。凝灰岩切石の幅は最大で1.1mほどあり、地覆石、延石のいずれとみても一般的なものより大きい。

なお、東側面の凝灰岩のさらに東側の整地土内で凝灰岩粉末の広がりを検出した。凝灰岩を据えた後に凝灰岩粉末を撒布しつつ、周囲を土砂で固定したものと考えられる。

階段痕跡SX11326 調査区北端の中央において、SX11325と同様に整地土上に薄く貼り付いた状態で、凝灰岩切石の底部を検出した。その位置と形状から、大極殿基壇の南面東階段の痕跡とみられる。逆凸字形の平面形のうち、西側面と南面西側が残存するが、東半については残りが悪く、東側面の一部が残存するのみである。そのため、正確な規模は不明であるが、東西幅は切石底部の内法で5.8m以下、出は凝灰岩の南端までで3.3mを測る。石材は、SX11325同様、二上山産出の白色角礫凝灰岩であり、やはり周囲から竜山石（流紋岩質溶結凝灰岩）の破片が出土している。

なお、東階段の周囲には部分的ではあるが礫敷が残存する。使用された礫は、前述の礫敷広場SX10888よりも小粒であり、大極殿基壇の周辺では内庭よりも意図的に小粒の礫が敷かれた可能性がある。礫敷の下には版築状に2～3層の土砂が施されており、またその層理面にはSX11325と同様に凝灰岩粉末が広がる。凝灰岩切石を設置した後、その周囲に凝灰岩粉末を撒布しながら整地土を施し、上部に礫を敷いて基壇まわりの整備が完了した状況を復元できる。ただし、凝灰岩の底面から礫敷上面までの標高差は10～15cmほどであり、凝灰岩を固定するための整地土はさほど重厚ではない。 (廣瀬)

宮造営期の遺構

運河SD1901A 調査区中央を南北に貫流する素掘溝。この溝は藤原宮の造営に関わる資材を運搬するための運河であるとされ、現在までに藤原宮第18次調査の北面中門下層（『藤原概報 6』）から飛鳥藤原第169次調査の朝堂院朝庭下層（『紀要 2012』）までの南北570mで検出されて

いる。調査区南側中央部の南北6.0mの範囲で整地土を掘り下げ、SD1901Aの調査をおこなった。この範囲において検出したSD1901Aは、幅6.7m、深さ1.8mを測り、底面の標高は南端で68.9m、北端で68.8mである。北に向かって底面の標高が低くなっており、北流するという既往の調査成果と合致する。基本層序は上から暗褐色粘質土（厚さ0.4m）、暗オリーブ灰色粘質土（厚さ0.1m）、黒色粘質土（厚さ0.7m）、暗灰色シルト（厚さ0.3m）、灰色粗砂（厚さ0.4m）である。暗褐色粘質土から暗灰色シルトまではSD1901Aの埋立土である。後述する斜行溝SD11250との交点付近では、黒色粘質土の下部およそ0.1mは有機物を多く含む。この有機物を多く含む層はSD11250の埋土と共通する。最下層の灰色粗砂層は運河SD1901A機能時の堆積層である。この層からは多量の土器・木製品・鉄製品・木簡・種子・獣骨などが出土した。獣骨はウマ、ウシ、イヌを確認した。とくにウマについては完形の頭蓋骨が3個体出土している。 (大澤正吾)

南北溝SD10801B 調査区東側にある幅2.7m、深さ1.2mの南北方向の素掘溝。南側の朝堂院で運河SD1901Aから派生し、大極殿院南門を避けて東へと屈曲した後、再び北へと延びる。今回の調査では、調査区東半で北へさらに18.0m延びることが判明した。掘り込み面は礫敷広場SX10888直下の整地土に覆われる。北区東北隅と、後述する斜行溝SD11250との合流点である南区東南隅を堆積状況の確認のために掘り下げた。

埋土は、上層が灰色から褐色の厚い砂質土からなり、中層以下は粘性が高く、草木の根や木屑などの有機物を多量に含み、瓦片も比較的多く含む暗オリーブ灰色粘質土、その下が暗緑灰色粘土である。暗緑灰色のシルトないし砂礫層の地山を掘り込んでいる。この暗オリーブ灰色粘質土は、一部SD11250側へも延びるが、下層の厚い粘質土にのり上げるように収束する（図72）。SD11250がある程度埋まった後も、SD10801Bが開いていた時期があったことがわかった。なお、暗オリーブ灰色粘質土から大量に出土した木屑は、藤原宮造営時に生じた建築部材の加工屑とみられる。SD10801Bの粘質土中に木屑が多量に含まれる状況は、第160次調査、飛鳥藤原第179次調査（『紀要 2014』）でも確認されており、SD10801Bが一連の作業で埋められたことを裏付ける。

斜行溝SD11250 南区で検出した、調査区の南東から

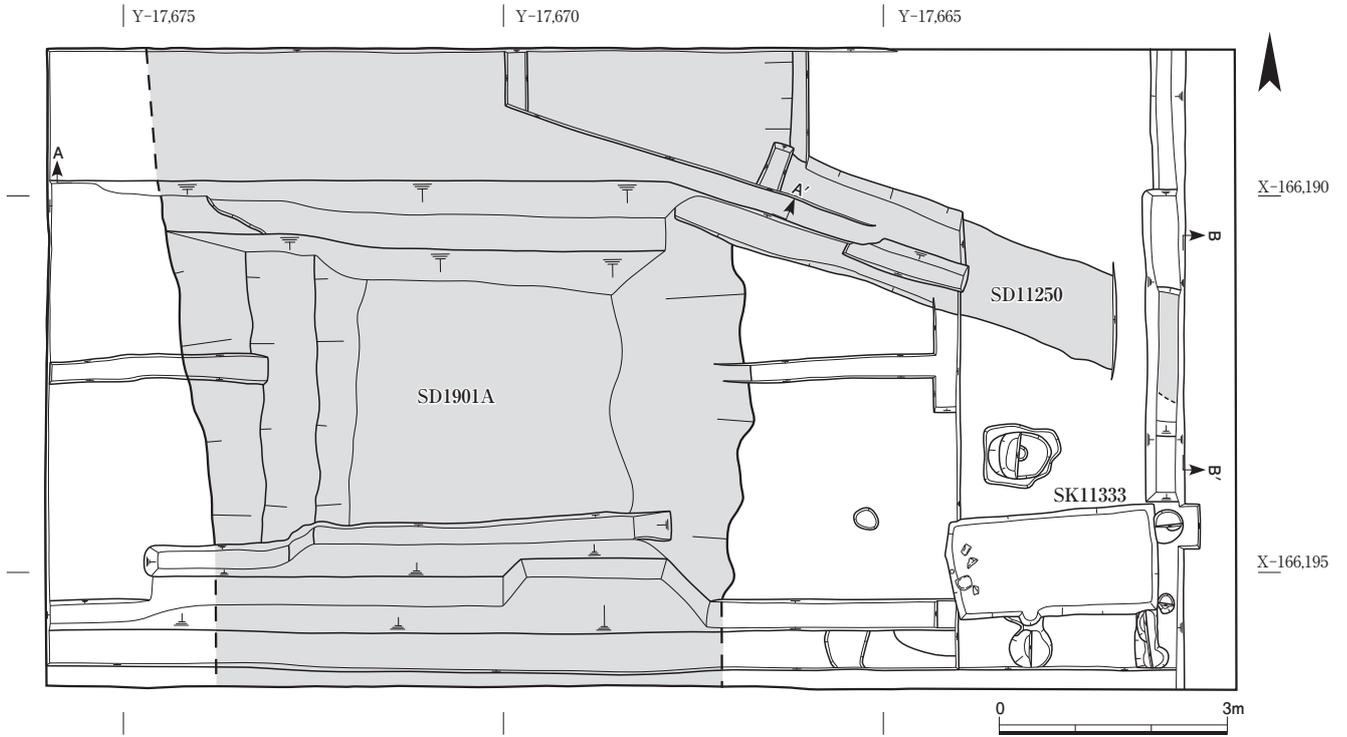


図69 南区中央部下層遺構図 1 : 100

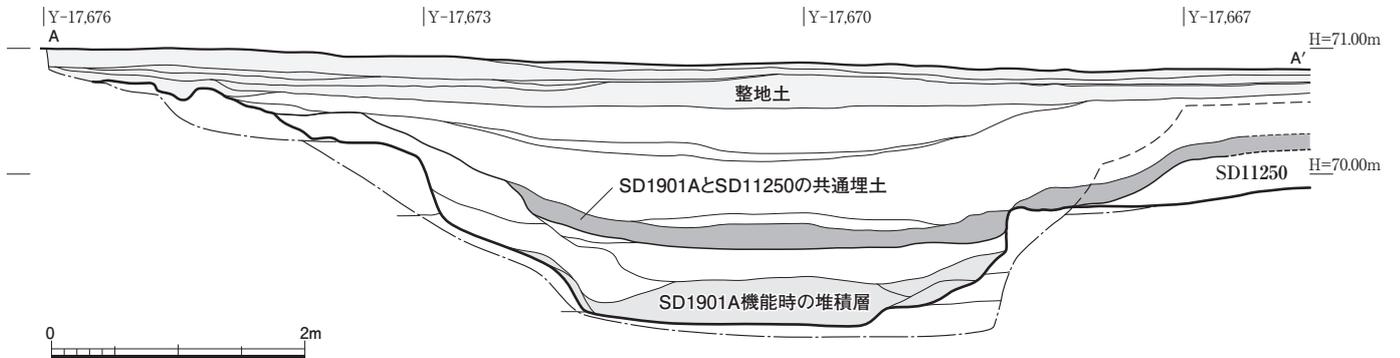


図70 運河SD1901A・斜行溝SD11250断面図 1 : 60

北西に延びる幅1.0~1.5mの素掘溝。深さは検出面から1.2mあり、南北溝SD10801Bから北西方向に分岐し、北西端は、運河SD1901Aに接続する。断面は箱形で、埋土最下層に若干の小礫の堆積はみられるものの、粗砂などの堆積はなく、壁面の浸蝕痕もみられない(図71)。埋土の中層以下はグライ化しているが、下層ほど粘質となり上層ほど砂質の土で埋められている。上述したとおり、SD1901Aと共通する埋土が存在することから、ある時点でSD11250とSD1901Aがともに開いていた時期があったことを示している。またSD11250とSD10801Bにも同一の粘質土がまたがって堆積しており、一時期、と

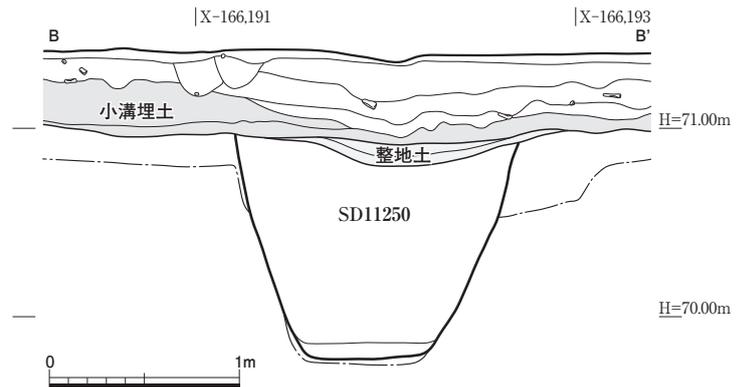


図71 斜行溝SD11250断面図 1 : 40

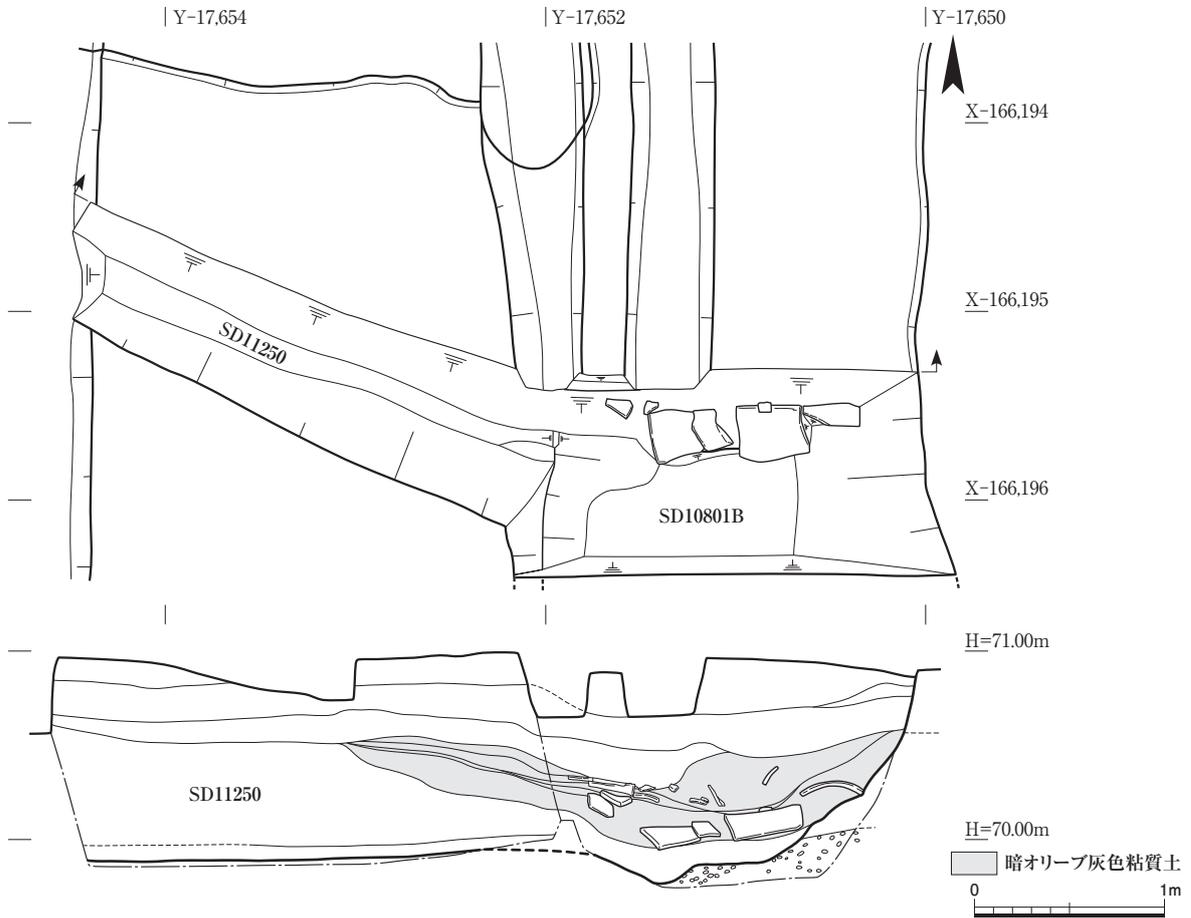


図72 南北溝SD10801B・斜行溝SD11250遺構図・断面図 1:40



図73 南北溝SD10801Bと斜行溝SD11250 (南東から)

もに開いていた時期があったことを示している。

なお、第182次調査では、SD11250は運河SD1901Aの埋立土を掘り込んでおりSD11250が新しいと推測して報告した(『紀要 2015』88頁)。しかし、今回の調査の結果、第182次調査でSD11250の埋土と判断したものは、礫敷施工直前の整地段階で沈下した部分に充填された別の土(図71整地土部分)であり、SD11250の本体ではないことが判明した。

(清野)

長方形土坑SK11333 調査区南東部で検出した長方形土坑。第二次整地土を掘り込む。東西2.8m、南北1.4m、深さ0.5mを測る。検出面から深さ0.4mまでは均質な土で水平に埋め立てられる。また、深さ0.4m付近の西小口面で礫群を確認した。この土坑には、東辺に2基、南辺に3基の小穴が隣接し、最終埋土を同じくすることから一連の遺構と考えられる。土坑の西壁でも杭状の小穴を1基検出した。東辺南隅の小穴で杭状の柱根を検出したため、何らかの施設をともなったものとみられるが、

これらの小穴はいずれも浅く、貧弱であり、覆屋などの建物となる可能性は低い。なお、北側で検出した柱穴は、他の小穴と異なり掘方が深く、土坑にとまなうものかは不明である。この土坑からは須恵器杯Bが出土しており、藤原宮造営期の遺構とみてよいが、7世紀後半の遺構としては類例が見当たらず、性格は不明である。（大澤）

宮廃絶後の遺構

建物SB11334 北区西寄りにある総柱の掘立柱建物で、桁行2間以上、梁行2間で東西棟とみられるが、西側の大部分は調査区外にある。柱間は桁行方向が6尺に対し、梁行方向が7尺とやや長い。柱穴は一辺0.8~0.9m、深さ0.4m以上の不整形。抜取穴はいずれも橙色の砂で埋められている。建物SB11335・SB11337、柱列SA11339と重複し、南側の柱穴2基はSB11335の柱穴によって壊されている。宮廃絶後の建物の中ではもっとも古く位置づけられ、南側柱列の東から2基目の柱穴からは奈良時代の土器が出土している。

建物SB11255 調査区中央西寄りにある掘立柱建物で、南半を第182次調査で検出しており、今回の調査で桁行2間以上、梁行2間で、南側に廂の付く東西棟であることが判明した。柱間は桁行、梁行とも7尺等間。柱穴は一辺0.5~0.6mの方形、遺構検出面からの深さは0.5mを測る。北側柱列の東から2基目には柱根が残る。建物SB11335・SB11337と重複し、SB11335の南側柱列が北側柱列を壊して掘り込まれていることから、この建物よりも古い。北東隅柱の抜取穴から平安時代の土器が出土している。

建物SB11335 北区南西寄りにある東西棟の掘立柱建物。桁行3間以上、梁行2間で、柱間は桁行、梁行とも7尺等間。柱穴は直径0.4~0.5mの不整形、遺構検出面からの深さは0.4m。北側柱列の東から3基目では柱掘方底面に石が置かれており、礎板石のような役目を果たしていたものと考えられる。この柱穴や南側柱列の東から2基目の柱穴から奈良時代後半から平安時代前期頃の土器が出土している。建物SB11334・SB11255・SB11337と重複し、SB11334・SB11255の柱穴を壊して建てられており、それらよりも新しい。

建物SB11336 北区中央南寄りにある南北棟の掘立柱建物。桁行3間、梁行2間で、柱間は桁行方向で7尺、梁行方向では5ないし6尺となる。柱穴は直径0.3~0.5m



図74 建物SB11335・SB11337（西から）

の円形ないし方形で、遺構検出面からの深さは0.4m。建物SB11337・SB11256と重複し、SB11337よりも古い。配置関係からSB11335と同時期に建っていたと考えられる。

建物SB11337 北区南西寄りにある東西棟の掘立柱建物。桁行4間以上、梁行2間で、南側と東側に廂が付く。柱間は桁行、梁行とも7尺等間。身舎部分の柱穴は直径0.3~0.5mの円形ないし隅丸方形で、深さは0.5m以上。廂部分の柱穴は小さく、0.2m~0.5mの円形ないし楕円形で、深さは0.5m以上。建物SB11336よりも新しい。

建物SB11256 調査区中央南西寄りにある南北棟の掘立柱建物。桁行5間、梁行2間。柱穴は小型で、直径0.2~0.3mの円形。柱間は桁行方向で7尺、梁行方向では8尺となる。第182次調査で確認していた掘立柱建物SB11256の北側柱列となる。西側に廂が付くとしていたが、今回の調査で西側の廂の柱穴は北側では確認できず、また南側の廂の柱穴も再度検討したが、柱筋の通りが悪く、柱穴としては貧弱なため、廂の付かない側柱建物に認識を改めた。柱穴内から黒色土器片が出土しており、平安時代に降る建物である。

掘立柱塀SA11338 建物SB11337の1.8m北側で検出した小型の柱穴からなる東西塀。7尺等間で、SB11337の北側柱列と柱位置が揃うことから、SB11337の目隠塀とみられる。4間分検出した。

掘立柱塀SA11339 建物SB11337の東3.5mで検出した小型の柱穴からなる南北塀。柱間は6尺であるが、1間のみ4尺となる部分がある。6間分検出した。SA11338と柱穴の規模や形状が似ることから、SB11337と同時期のものともみられる。

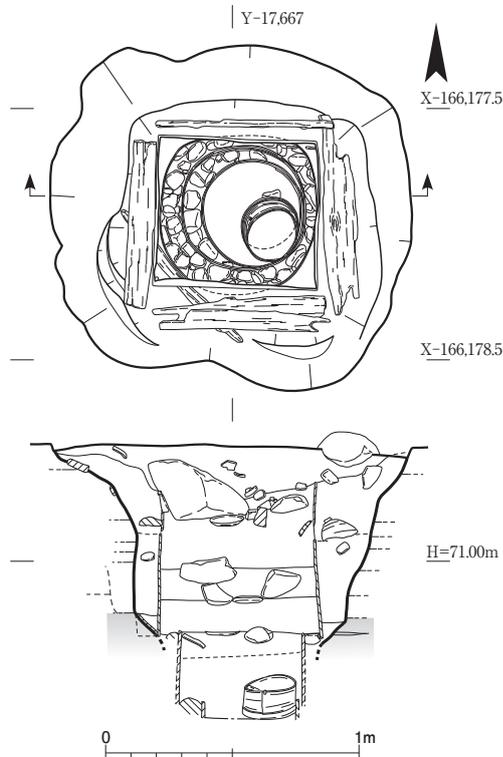


図75 井戸SE11340遺構・断面図 1 : 30

掘立柱塼SA11343 北区中央北寄りにある比較的大型の柱穴からなる南北塼。6尺等間で3間分を検出した。柱穴は0.4~0.5mの円形ないし方形。

掘立柱塼SA11344 北区中央北寄りにある比較的大型の柱穴からなる南北塼。6尺等間で6間分を検出した。柱穴は0.3~0.5mの円形ないし方形。前述の柱列SA11343とほぼ並行する。当初はSA11343と組み合せて、掘立柱建物となる可能性も検討したが、南妻柱が検出されず、北妻柱と想定した柱穴も柱筋がずれているため、SA11343と組み合う2条の並行する掘立柱塼とした。

小溝群 幅0.4m前後の素掘溝群。耕作にともなう溝と考えられる。調査区西側では、南北方向の小溝の一部が上述の建物群に先行して掘り込まれている。調査区東側では内庭の礫敷を壊して南北方向に2時期分が掘り込まれており、松葉状を呈しているが、重複関係は北で西に大きく振れる溝群が新しい。埋土からは8世紀末頃の土器が出土し、この小溝群を覆う赤褐色土からは後述する緑釉陶器が出土している。

整地層SX11251 北区から南区にまたがる帯状の整地層。整地層は南北におよそ21.5m、東西におよそ6m、厚さは約0.3mを測る。第182次調査で確認されたが、今



図76 井戸SE11340曲物検出状況(北から)

回の調査でその範囲が確定した。第182次調査で奈良時代中頃の土器が多数出土している。

溝状遺構SX11258 調査区中央の南北畦西側を南北に貫く溝状の落ち込み。第182次調査で確認していたが、今回の調査でその北端を確認した。幅4.0m、深さ0.5m前後。大極殿院内庭の礫敷を掘り込むが、北側に向かって徐々に深さを減じており、北区北半では底部に礫敷が残存する。埋土からは奈良時代から平安時代までの土器が出土している。南区で第182次調査の際に確認していた、西肩法面の石列SX11252は、北区では抜取穴のみが連続して残っている状況を確認した。抜取穴列は北で西に6度ほど振れている。

土坑SK11341 北区中央付近で検出した円形の土坑。直径1.1mで、遺構検出面からの深さは最大で0.6mである。奈良時代の土器を含む。(廣瀬・清野)

井戸SE11340 北区中央付近で検出した井戸(図75)。掘方は上部がすり鉢状に開き、深くなるにつれ径を減ずる形状で、上部の井筒が位置する部分で直径0.8m、下部の井筒が位置する部分で直径0.6mを測り、深さは遺構検出面から1.1m以上ある。掘り込まれている土層のうち、標高70.6m以下の部分については、運河SD1901Aの埋土である黒色粘質土となっており、SD1901Aを埋め立てた場所に掘られていることがわかる。

最上部は横板組の隅柱留構造、それ以下は曲物を用いた3段以上におよぶ井筒が残存していた。廃棄にあたっては、石列SX11252を構成していたとみられる花崗岩片を含む土で埋められている。埋立土の中からは10世紀前半の土器や底板の残る曲物が出土した(図76)。

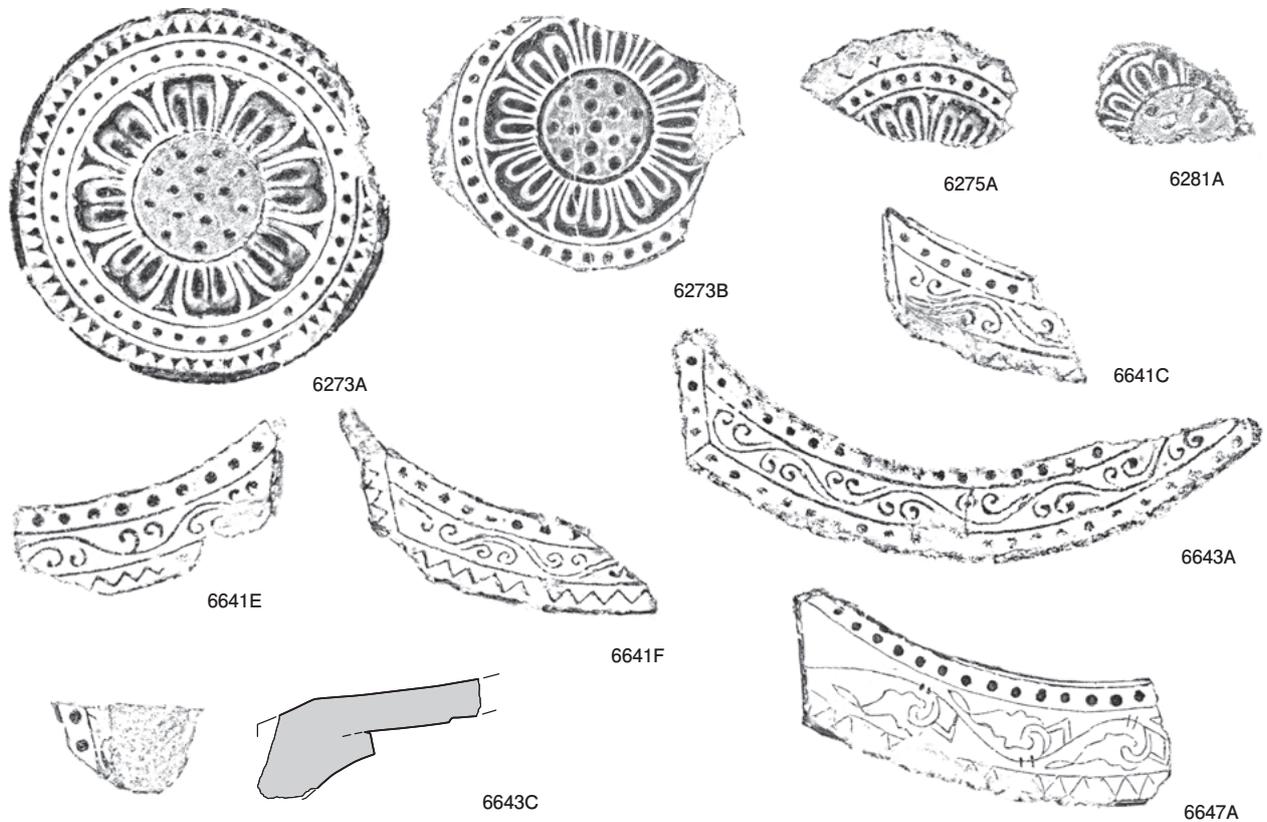


図77 第186次調査出土瓦 1 : 4

古墳時代の遺構

土器棺墓ST11342 北区西端付近で検出した土器棺墓。掘方は、最長0.4mが残存しており、深さは遺構検出面から0.35mである。掘方は棺を若干上回る程度である。口縁を打ち欠いた壺を身とし、甕を縦に半裁して蓋とする。古墳時代前期と考えられる。 (山本 亮)

3 出土遺物

瓦 磚 類

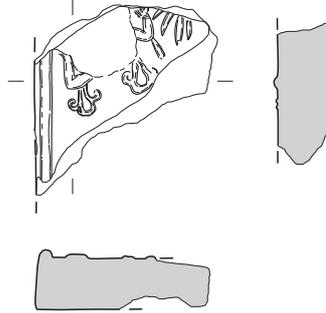
瓦 類 第186次調査出土の瓦磚類は表20のとおり。大部分が床土・包含層および耕作溝からの出土である。南北溝SD10801Bからは比較的多くの瓦が出土しており、軒平瓦は6643Aa・6643C・6647Aが出土した。運河SD1901Aからの瓦の出土はなかった。新規調査面積でみると100㎡あたりの瓦の出土重量は198.0kgで、同じく大極殿院内庭の調査である第182次調査の181.6kg/100㎡に近く、朝堂院朝庭の第179次調査の80.1kg/100㎡や第174次調査の52.8kg/100㎡よりもあきらかに多い。

軒瓦は、型式不明のもの、重弧文軒平瓦を含めて合計117点が出土した。軒丸瓦では6273A・6273Bが多

表20 第186次調査出土瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6233	Bb	1	6641	Ab	1	面戸瓦	43
	?	1		C	5	鬘斗瓦	41
6273	A	10		E	12	隅切平瓦	1
	B	7		F	6	丸瓦 (ヘラ描)	12
	D	1		?	2	平瓦 (ヘラ描)	20
	?	15	6642	Ab	1		
6274	A	1	6643	Aa	1	瓦製円盤	19
6275	A	3		Ab	1		
	D	3		B	1	磚伝	1
	H	1		C	5		
	I	1	6646	Ba	1		
6279	Ab	2	6647	A	1		
	B	2	重弧文		3		
6281	A	3	不明		11		
	B	1					
不明		14					
合計		66	合計		51		
						丸瓦	平瓦
重量						316.7kg	1,385.9kg
点数						3,189点	18,739点

く出土し、軒平瓦では6641Eがとくに多く、6641C・6641F・6643Cがそれに次ぐ。6273A・6273B-6641Eの組み合わせは大極殿や大極殿院回廊の所用瓦とされる。6275A-6643Cは大極殿院南門や南面回廊で、



(復元図下図：名張市教育委員会「夏見廃寺」1988 に加筆)

図78 第186次調査出土磚仏 1:2 (写真は1:1)

6281A-6641Cは朝堂院各所で用いられたとされ、出土点数比としてもとくに問題はない。一方で6641Fは西田中・内山瓦窯産で6281Bとの組み合わせで大極殿院回廊や朝堂院各所で用いられたとされるが、当調査では6281Bの出土点数は6641Fと比べて少なく、注意される。

6641Eは遺存状態がよいものは少ないが、確認できたものはいずれも範傷が認められる。6641Fは瓦当面付近の凹面・凸面をヘラケズリするものではなく、遺存するものはいずれも脇区を残す一群である。6643Aaは瓦範中央に縦方向の大きな範傷が生じており(Aa2)、胎土に砂粒を多く含むQグループのものである。6643Cには段顎とは別に平瓦部凸面に顎部状の段差をもつものが1点ある。瓦当部の遺存部位は限られるが、珠文付近の範傷から6643Cと同定した。顎部の高さは1.2cmである一方、平瓦部の段差は0.2cmほどと非常に低く、ユビオサエによってつぶれている部分もある。瓦当面側の顎部には縦縄タタキを施し、平瓦部側の顎部は丁寧にナデている。砂粒は少ないが、胎土から高台・峰寺瓦窯産とみられる。範傷の進行状況から6643Cの中でも比較的新しい段階のものともみられるが、遺存部位が限られるため詳細は不明。

ヘラ描き瓦には、丸瓦玉縁部凸面に「+」を、平瓦凹面に「+」や「≠」を記すものがある。

残存率から考えると単純な比較には問題があるが、第182次調査の出土瓦総重量2,078.5kg・軒瓦点数228点と比べると軒瓦が少なく、出土瓦総重量比では半分程度となる。当調査区は、大極殿院回廊や大極殿院南門付近の調査である第182次調査よりも大極殿に近接した位置にあたり、軒瓦点数の違いは、回廊と大極殿といった建物の違いによる軒瓦の使用数量・使用比率の違いによるとも

考えうる。だとすれば、当調査で出土した瓦の様相は、周辺の調査区以上に大極殿における瓦の使用状況を反映している可能性がある。

磚 仏 図78は磚仏片。三尊磚仏の一部で飛天と菩提樹の一部が残る。胎土は非常に精良で、遺存状態はやや不良だが丁寧に調整がなされており布目などは確認できない。色調は暗灰色。耕作溝より出土。藤原宮の南西部外周帯の調査である藤原宮第69-9次調査出土例(『藤原概報 23』)や三重県夏見廃寺出土例¹⁾などと同原型である。

(川畑 純/文化庁)

土器・土製品

第186次調査では木箱82箱分の土器・土製品が出土した。藤原宮造営期の遺構から出土した一群と、奈良時代から平安時代までの遺構・整地土から出土した一群とがある(図79)。宮期の出土量は極めて少ない。

SD1901A 出土土器 運河機能時の堆積層(灰色粗砂層)とその上位の埋立土(下位から暗灰色シルト・黒色粘質土・暗オリーブ灰色粘質土・暗褐色粘質土)から、多数の土器が出土している。多くは灰色粗砂層からの出土であるが、埋立土から出土した土器もあわせて図示した。以下、出土層位についてとくに触れないものは、すべて灰色粗砂層からの出土である。

土師器杯A(1~3)は内面に2段放射暗文を施すもので、口径16.0~20.0cmのものほか、11.5cm前後のものを含む。土師器杯C(4・5)は口径15.0cm前後のもので、底部外面は不調整、内面には1段放射暗文を施す。4の暗文はやや粗い。土師器食器のなかで大部分を占めているのは杯G(6~11)で、内面にハケ目をとどめる6や、やや丸底で厚手の7などもあるが、口縁部が外反し、色調がにぶい黄色(hue 2.5Y 6/4)を呈するもの(8~11)

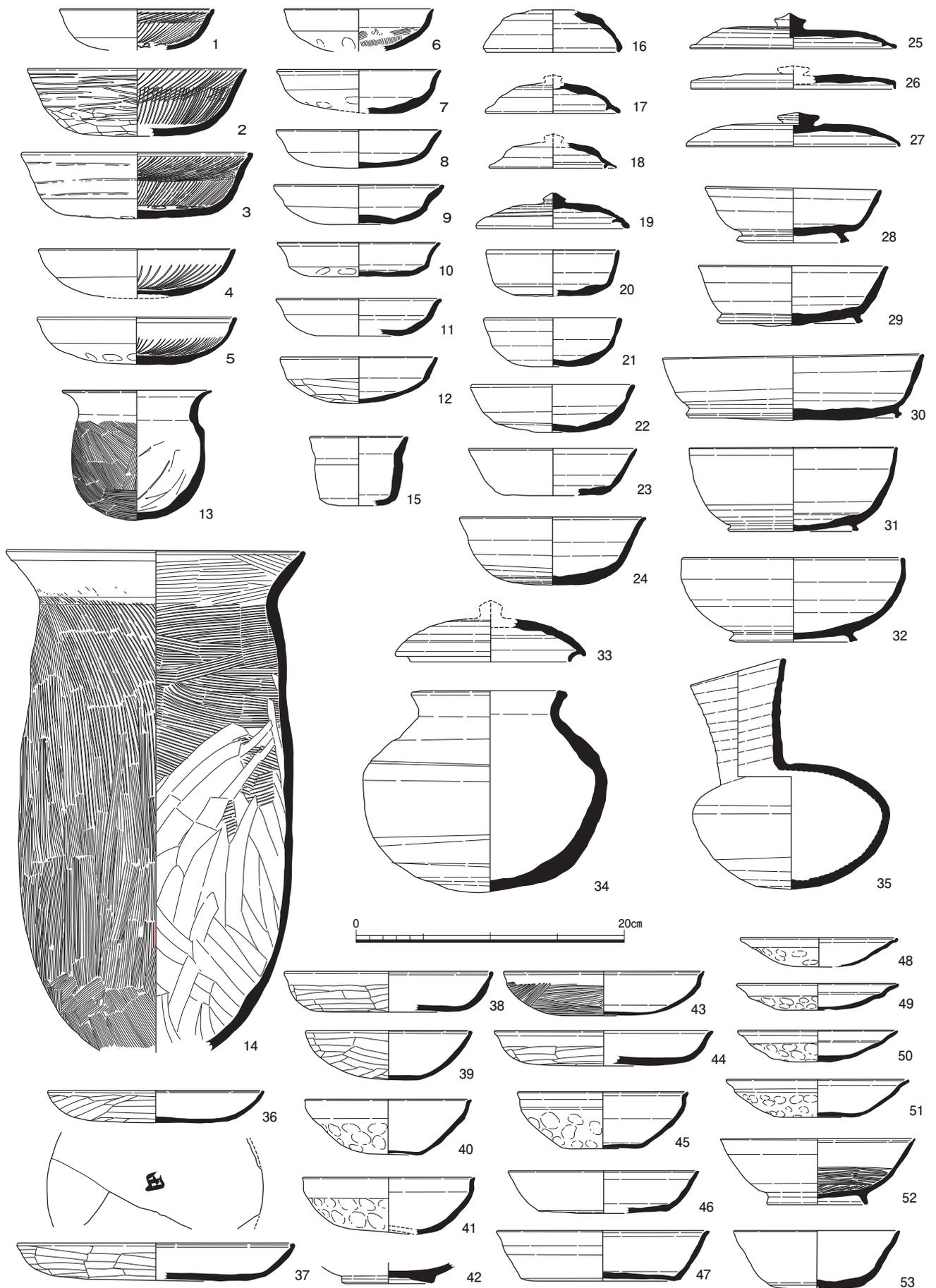


図79 第186次調査出土土器 1 : 4 (1~35 SD1901A、36~41 小溝群、42 赤褐色土、43~47 茶褐色土、48~53 SE11340)

が多い。このうち、9・10は底部外面に黒斑をとどめる。杯Hは図示した事例(12)のほかにも小破片が多く、土師器杯Gとともに土師器食器の主体をなす。土師器甕は破片数がもっとも多く、球胴形の小型品(13、暗灰色シルト出土)のほかにも長胴甕(14)もある。後者は体部内面の下半をヘラケズリで整えるもので、いわゆる「伊勢型」にあたる。小型壺(15、暗オリーブ灰色粘質土出土)は底部外面に黒斑をとどめる。

須恵器杯H蓋(16)は口径11.0cm未満の小破片である。杯G(20)とその蓋(17~19)はいずれも暗褐色粘質土からの出土で、蓋の外径は9.5~11.5cmの間におさまる。このほか、灰色粗砂層からも杯G身が1点出土している。杯A(21~23)は口径11.0~13.0cmまで、底部外面にヘラ切り痕を残す。21は黒色粘質土から出土したもので、これ以外は灰色粗砂層の出土例である。碗A(24)は口径14.0cm、器高5.2cmで、底部外面をロクロケズリで整える。杯蓋にはかえり付のもの(25)とかえりをもたないもの(26・27)とがあるが、口径は15.0~16.5cmにおさまる。いずれも杯Bまたは碗B・Cの蓋であろう。杯Bは口径13.0~14.5cmのもの(28・29)と、口径19.5cmのもの(30)とからなる。28のみ暗オリーブ灰色粘質土からの出土で、これ以外は灰色粗砂層からの出土品である。碗Cは口縁部が丸みを帯びつつ内彎気味に立ち上がる器形で、口径16.0cm前後のもの(31、黒色粘質土出土)と、口径17.0cm前後のもの(32)とがある。広口壺(34)と平瓶(35)はいずれも完形品で、壺の蓋(33、暗オリーブ灰色粘質土出土)は湖西産とみられる。このほか、灰色粗砂層からは土馬の頭部が出土している。

小溝群出土土器 調査区東半部を松葉状に縦断する小溝群からは、主に奈良時代末の土器が出土している。土師器杯A(38)、碗A(39)、皿A(36・37)は外面にヘラケズリを施すもので、36は底部外面に「田」との墨書がある。土師器碗C(40・41)は底部外面を不調整にとどめるものである。

茶褐色土ほか出土土器 茶褐色土は調査区西半・石列SX11252より西側に分布する奈良・平安時代の包含層で、この時期の土師器・須恵器が出土している。土師器杯は底部外面をヘラケズリののち稠密なヘラミガキで仕上げるもの(43)や、低平で外反口縁をもつもの(44)がある。45は典型的な土師器碗Cである。このほか、図

示しなかったが粗い1段放射暗文を施した土師器杯Aや、底部外面をヘラケズリで整えた土師器鉢Aなどがあり、小破片には平安時代に降る土師器皿もある。46・47は須恵器杯A。46は外面に、47は内面に火襷をとどめ、後者は外面に降灰を認める。

このほか、調査区中央部分に位置する小溝付近の赤褐色土からは削り出し高台の緑釉陶器碗(42)が出土している。

SE11340出土土器 井戸枠内・井筒内や埋土最上部から平安時代の土師器皿、黒色土器などが出土している。図示したものは51が井戸枠内、それ以外は井筒内からの出土である。土師器皿(48~51)は口径12.0~15.0cmで、底部外面を不調整にとどめる。器形からは10世紀前半の土器群とみられる。黒色土器B類の碗(52)も同時期のものであろう。須恵器杯A(53)はやや鉢の開いた器形のものであるが、井戸の下層にあるSD1901A埋土に本来含まれていたものとみられる。(森川 実)

土器棺墓ST11342出土土器 土坑内から一括で出土した(図80)。それぞれ土器棺の蓋・身であったものとみられる。1は布留形甕。口径15.0cm、胴部最大径21.4cm。胴部はやや長胴を呈し、口縁部はやや内彎気味に開き端部が肥厚する。胴部は外面をハケ調整し肩にヨコハケ、内面は丁寧なヘラケズリする。口縁部は内外面とも回転性のあるヨコナデを施し、とくに外面の単位が顕著である。2は壺の胴部。胴部最大径29.6cm。倒卵形を呈し、外面は縦および斜めのハケののち肩に暗文状のミガキ、内面はオサエののち下半をヘラケズリする。内面のオサエは関節の圧痕から拳によると判断できる。2は諸特徴と、胎土に結晶片岩を含むことから徳島県吉野川流域から搬入されたものとみられる。いずれも古墳時代前期半ば、布留1式後半のものと考えられる。(山本 亮)

金属製品・石製品・木製品・獣骨

階段痕跡SX11325・11326の周辺からは、二上山産の白色凝灰岩と竜山石の欠片が出土した。前者は6.3kg、後者は2.9kgほどを取り上げたが、竜山石の欠片は大部分を取り上げず現地に残しており、その重量比は有意なものではない。

運河SD1901Aからは、鉄器(鎌、紡錘車ほか)、木製品(斎申、付札、曲物底板など)、種実(モモ、メロン仲間など)、獣骨(ウシ、ウマ、イヌなど)、炭などが出土した。南北溝

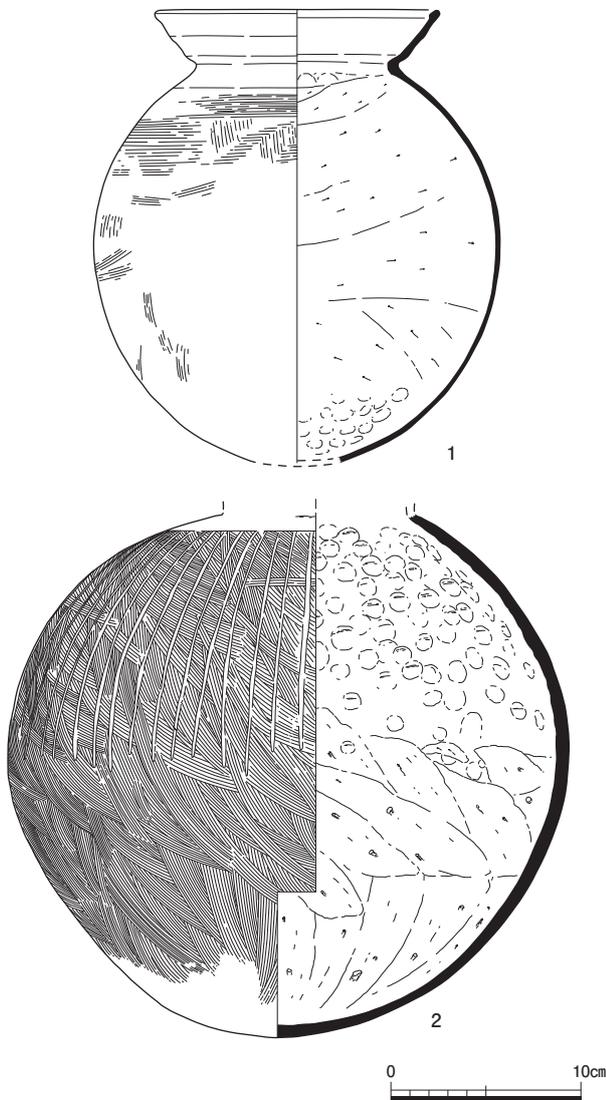


図80 土器棺墓ST11342出土土器 1 : 4

SD10801Bからは、前述したように大量の木屑が出土しているが、明確な木製品は出土していない。藤原宮造営時に生じた建築部材の加工屑とみられる。

平安時代の井戸SE11340では、横板組の井戸枠とその内部で出土した曲物を取り上げた。曲物（図81）は底板を木釘でとめた後、籬でしめている。側板の結合は1列外4段綴じと推測され、またやや上よりの対称位置に樺皮の通しがある。民具例からすると、容器と蓋とに紐を回しかけて縛る際に、紐が抜け落ちないように結んでおく紐かけかと推測される。なお井戸内からはモモ、カラスウリなどの種実も出土した。

今回の発掘調査では、このほかに鉄釘、鉄滓、滑石製紡錘車、滑石製白玉、滑石製有孔円盤なども出土した。

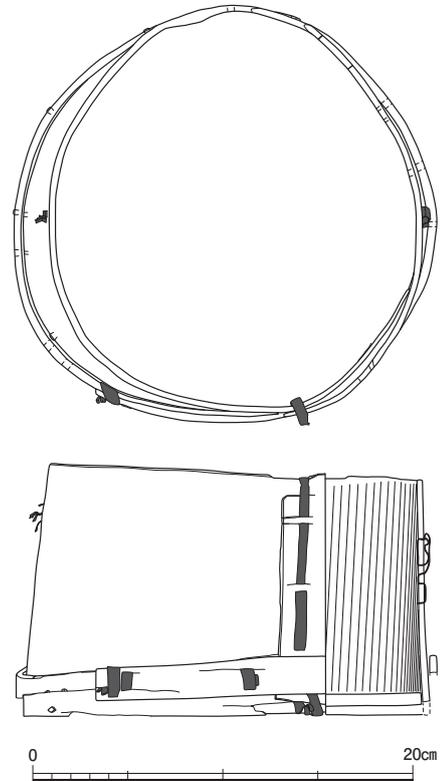


図81 井戸SE11340出土曲物 1 : 4

また磔敷下の整地土や宮廃絶後の小溝群からウシあるいはウマとみられる歯が出土している。なおSD1901A出土の遺物は現在整理中であり、詳細は来年度報告予定である。

(大谷育恵)

木 筒

運河SD1901Aから、木筒（削屑）1点が出土した。四文字分程度の墨痕が確認され、うち下から2文字目は「部」（字体はア）かと思われる。人名、地名、官司名などと思われるが不詳。

(山本 崇)

4 ま と め

藤原宮期の磔敷広場を確認 今回の調査で、昨年度の第182次調査区とあわせて、大極殿院南門基壇から大極殿基壇に至る内庭を南北に調査したことになる。磔敷の遺存状況が良好ではない部分もあるが、拳大の磔を敷きつめて整備されていたことが再度確認できた。

この場所は、大極殿院南門と大極殿の間にあたり、幢幡関連遺構、ことに大宝元年（701）の元日朝賀にのぞんで「正門」に樹立された²⁾という幢幡関連遺構の確認が重要な課題であったが、2カ年にわたる内庭部の

調査においてはそうした遺構を確認できなかった。『紀要 2009』では、飛鳥藤原第153次調査（朝堂院地区）においてみつかった柱穴群SX10770～10778、SX10760・SX10765～10767を幢幡支柱の関連遺構とするものの、その配置から大宝元年元日朝賀のものとは即断できず、大極殿院の調査成果を待って判断すべきとしていた。第182次調査および今回の調査では、藤原宮中軸線周辺にあたる調査区西端付近において幢幡遺構の検出を試みたが、それと思しき柱穴列は確認できなかった。

大極殿南面の階段の一部を確認 大極殿の南面階段の一部を検出した。かつて日本古文化研究所が本調査地の北側隣接地は調査をおこなっているが、その際には不明確であった大極殿南面階段の存在と配置が判明した。今回検出した階段は、現存する基壇の高まりの南端よりも6mほど南に位置するため、基壇の南辺は大きく削平を受けているものと推測される。しかしながら、今回の調査で基壇周囲には、階段および当時の遺構面がかるうじて遺存している状況を確認できたことから、今後の調査の進展によって、大極殿の構造の解明が進むものと期待できる。

宮造営期の遺構を確認 造営期に存在した運河や溝については、今回その分岐点や合流点を断面観察したことによってさまざまな事実があきらかになった。まず、斜行溝SD11250は調査区中央の運河SD1901Aとの関係において、SD1901Aがある程度埋まった後に、有機物を多量に含む黒色粘質土がSD11250と共通して堆積しており、同時開口している時期があったことがわかった。また、SD11250と南北溝SD10801Bも、当初は同時に開口していたが、前者がある程度埋まった後も、後者は開いている時期があり、最終的に木屑などの有機物を多量に含む粘質土で埋められたことが判明した。このようにSD1901AとSD11250、およびSD10801BのSD11250との分岐点以南については、ある時期ともに開口していた時期があったことが断面観察から判明するが、詳細な変遷過程についてはいくつかの可能性が考えられる。

SD10801Bは、第153次調査において、SD1901Aを一部埋めた後に大極殿南門を迂回するように掘られたことが判明している。迂回した後に再度本調査区内のSD11250を通じて、再度SD1901Aに一時的に接続しているという今回の調査成果は、一見この事実と矛盾するよ

うにみえるが、次のように考えられる。

- 1) SD10801Bは当初、南面回廊の北側で北西へと曲折し、SD11250を介してまだ埋まりきっていないSD1901Aに合流していたが、ある時曲折点から北へと延伸させた。

あるいは

- 2) SD10801Bははじめから北へと延びる溝で、ある時北西へと支線(SD11250)を分岐させ、まだ埋まっているSD1901Aにつなげていた。

1)・2) いずれにせよ、SD1901Aは南門より北側でしばらく開いていたことになり、その埋め立ては大極殿院よりも朝堂院のほうが先んじて始まっていた、ということになる。今回の調査成果は宮全体の造営過程を考える上で貴重な所見となる。

SD1901AやSD11250の埋め立て後は、それらを含む範囲において、異なる種類の土を交互に積み重ね、版築状に丁寧な整地をしている。最終的に大極殿院内庭の礫敷広場となることを想定して丁寧な整地をおこなったと考えられるが、結局はその後に沈下したようで、その部分については後世の削平をまぬがれ、礫敷がよく残ることとなった。

宮廃絶後の遺構群 今回の調査では、藤原宮廃絶後の掘立柱建物6棟や建物にともなう塀、井戸、小溝群、整地層などを検出した。藤原宮廃絶後には、奈良時代のうちに小溝群が掘り込まれており、この場所が急速に耕地化するとともに、その後調査区西側で奈良時代から平安時代にかけて、掘立柱建物が何度も建て替えられていることがあきらかになった。これまでにも、大極殿院や朝堂院では奈良時代以降の建物が多数みつかっており、今回の建物もそれらと関係するものとみられる。建物には井戸をとまなっており、緑釉陶器片も出土していることから、宮廃絶後の藤原宮跡地の利用を考える上で重要な資料を得ることができた。

(清野)

註

- 1) 名張市教育委員会『夏見廃寺』1988。
- 2) 『続日本紀』大宝元年(701)正月乙亥朔条。